目　次

序　『紫式部日記』の史的位置……3
I　『紫式部日記』の表現世界……17
第一章　寛弘五年の記の展開と方法……19
一、女房日記的性格と憂愁の叙述の方法……19
二、上臈女房と憂愁の叙述の方法……42
三、寛弘五年十月十七日の記事の位相……59
四、寛弘五年年末の記述の方法……75
第二章　消息的部分の展開と方法……94
一、消息的部分の方法……94
二、中将の君の書簡という方法……115
三、いわゆる三才女批評の方法……131
第三章　十一日の暁の記の方法……152

第四章　寛弘七年の記の方法……173
Ⅱ　『紫式部日記』の描写方法……193
第一章　服飾描写の方法……195
一、女性貴族の服飾描写の方法……195
二、男性貴族の服飾描写の方法……213
第二章　人物描写の方法……232
一、藤原道長……232
二、藤原公任……249
三、むまの中将（一）……266
四、むまの中将（二）……281
第三章　物語世界の摂取の方法……293
一、昼寝する宰相の君の描写と『こまのの物語』……293
二、上臈女房の描写と物語の表現世界……302
Ⅲ　『紫式部日記』以後の日記文学―『紫式部日記』世界の揺曳―……321

第一章　『更級日記』の方法―表現の深部へ……323
一、夫俊通の描写の方法……323
二、初瀬詣で考……349
三、初瀬詣で考・補遺……365
四、物語創作が記されない意味……371
第二章　『讃岐典侍日記』の方法―上巻の時間……390
Ⅳ　『紫式部日記』研究の現在……409
第一章　『紫式部日記』の研究展望と問題点……411
第二章　「紫式部」の伝記の研究展望と問題点……433
Ⅴ　結び……439
初出論文一覧……461
あとがき……464
索　引……467

第一章　寛弘五年の記の展開と方法

一、女房日記的性格と憂愁の叙述の方法

『紫式部日記』（以下、『日記』と略す）は対立する二つの方向の叙述を持っている。すなわち、公的な性格を宿した記録的叙述、主家の盛儀を克明詳細に記す叙述と、その一方で私に内向する自照的叙述、自己の憂いを連綿と綴る叙述の混在である。

文学作品はつねにアンビバレンツなものをかかえもつであろうが、『日記』のそれは一見内部矛盾にもおぼしき分裂が生じているかに見える。しかし、実際に『日記』を読む時、この二方向の叙述が不思議な調和の中で連関していることに気付かされることも事実である。このことが『日記』の主題や性格を考える上で一つの問題点になっていたように思われる。

『日記』を研究する上で、記録的叙述と憂愁の告白の同居をいかに位置付けるか、は根幹に関わる重大事であろう。『日記』の作品理解にも密接に関わる問題と思われる。

なお、『日記』の全体の構造を考える上で、消息的部分がそれ以外の部分と異質な性格を宿していることは否めない。結論からいえば、論者は消息的部分も主家慶祝の記を補完する存在と考えているが、詳細は別稿(注1)に譲ることとする。

一

『日記』をいかなる作品と位置付けるかについては、多分に『日記』の読みから還元されるべき問題ではあり、論者によって、その位置付けは千差万別である。また、その課題は『日記』がいかなる目的で書かれたのかという問題と表裏の関係にある。

その問題を考えるにあたって、『日記』が同時代の女流日記文学の中でも、稀に見る記録性を持っていることはまず確認されてよいことであろう。記録からの事実上の訣別が日記を文学たらしめたともいわれる日記文学の系譜の中で、行事記録に貪婪な関心がうかがえる『日記』の存在は特異なものとも言える。それも、この『日記』は行事の精確な描写を志向しており、そこにかけられた言葉の絶対量の多さを軽視するわけにはいかないと思うのである。

記録することへの志向という点では『日記』はいわゆる女房日記や歌合日記に近似する性格を持っている。女房日記については、一言触れておかねばならないだろう。女房日記はよく登場するジャンル規定の用語であるにかかわらず、その実態は、とりわけ平安時代の実態は、明確ではない。というのも、今日、女房日記の祖とされる『太后御記』は、現在『河海抄』に引用される断片六カ所しか伝わっていないのである。

『太后御記』については、石原昭平氏[注2]の早くの研究がある。『河海抄』にある六ケ所の断片はいずれも祝事、賀事の行事記録に限定され、いずれも穏子（太后）の側に立って記されている。筆者は、石原氏も説かれている如く、穏子自身ではなく、穏子に仕える女房であろう。女房日記を主家に奉仕する女房が主家の関わる行事、慶事を筆録するもの、と定義するならば、まさしくこの作品はその旨に合致するであろう。

『日記』もまた主家の皇子誕生という慶事を紫式部という女房が記しているわけだから、それだけを見れば『日記』は女房日記の流れにあるものと言ってよいかもしれない。例えば、『太后御記』の次のような記述、

おととくまかて給ぬ又をくり物沈のはこ一よろひいれたりせんたいの御てのまむようしう今一には本五まきやまとこと一云々（承平四年十二月九日御賀『河海抄』所引）

と、次の『日記』の記述にはほぼ同じ記録者としての態度が看取されるであろう。

よべの御おくりもの、けさぞこまかに御覧ずる。御櫛の筥うちの具ども、いひつくし見やらむかたもなし。手筥一よろひ、かたつかたには、白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ、侍従の中納言、延幹と、おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせたまへり。

両者の著作態度は同一と言っても過言ではなかろう。しかし、そのことをもって『日記』をただちに女房日記の系譜に組み込むわけにはいかないことは後述するところである。

次に歌合日記について触れておくが、このジャンルは女房日記と近似する性格を持っており、女房日記の形態の一つとも考えられる。歌合日記は現存する作品がいくつかあるので、その性格は明確である。主家主催の歌合に参画した女房が女房の視点から歌合の様子を仔細に記録したもの、といった性格を見て取ることができる。

すでに、中野幸一[注3]氏によって、歌合日記と『日記』の共通の表現が指摘されているように、『日記』中の「くはしくは見はべらず」「そなたのことは見ず」「奥にゐて、くはしうは見はべらず」「まほにも見えず」といった盛儀のすべてを記し得なかったことの断り書きと目される叙述と、歌合日記の「装束赤色に桜襲なるべし。されど見えねばかひなし」（天徳内裏歌合）「揖人舟人往きちがひたる、同じさまなればくはしうは書かず」（斎宮良子内親王貝合）といっ